『語用論研究』第 18 号(2016 年) pp. 78–101
© 2016 年　日本語用論学会

［会長就任講演］

文脈の科学としての語用論
―演繹的文脈と線条性―

加　藤　重　広[1]
北海道大学

語用論をいかなる研究と位置づけるかが研究者によって大きく異なることは言うまでもないが、語用論と意味論との分水嶺として文脈の関与の有無を指標に用いることは一般的と考えてよいと思われる。ここでは、語用論を文脈の科学（science of context）と位置づけて、文脈を論じたい。

1.　文脈の演繹的設定

言語学的な語用論研究の初期の成果であるギャズダーの記述をまず見てみよう。

(1)　Thus, contexts are sets of propositions constrained only by consistency. Treating context here as a set of propositions makes no theoretical claim and is intended as no more than a technical convenience: we could have treated context as a single proposition, as a sentence, or as a set of sentences, but any of these alternatives would have complicated the definitions to be given shortly.
(Gazdar 1979: 130)

ギャズダーは「文脈」を「命題の集合」としているが、単なる方法論上の便法であって、必ずしも枠組みを構成する思想に基づいているわけではない。文脈は表示上文のかたちをした命題の集合だが、一貫性によってまとまりをなしていると考えられている。もちろん、任意に集められた雑多で無関係な命題をいくら集積したところで、それは文脈とは呼ばれない。ここには、「一貫性」をどう規定するか、一貫性を評価する基準・視点をどう

[1]（かとうしげひろ）北海道大学・大学院文学研究科言語文学専攻言語情報学講座・教授、katosige@let.hokudai.ac.jp。

考えるかという問題があるが、この点は別の機会に論じたい。

Gazdar（1979）を踏まえ、Sperber and Wilson（1987）は、以下のように述べる。

（2） The set of premises used in interpreting an utterance constitutes what is generally known（see Gazdar.1979; Johnson-Laird.1983）as the *context*. A context is a psychological construct, a subset of the hearer's assumptions about the world. Each new utterance, though drawing on the same grammar and the same inferential abilities as previous utterances, requires a rather different context（if only because the interpretation of the previous utterance has become part of the context）. A central problem for pragmatic theory is to describe how the hearer constructs a new context for every new utterance.

（Sperber and Wilson 1987: 84–85）

「発話の解釈に用いる」premise の集合を文脈とする規定であるが、「発話の解釈に用いる」とするのは、ギャズダーにおける「一貫性」を見定める視点や基準と読み替えてもよいだろう。関連性理論は、聞き手の解釈という視点から語用論的な枠組みを構築するため、世界について聞き手が持つ想定の部分集合であって、心理的構築物だと規定している。つまり、聴者の知識の一部ないし全部が文脈をなす、ということである。文脈の定義中の premise は conclusion を引き出すために用いるものであることから、関連性理論は聞き手が引き出す解釈に重点があることがわかる。これに対して、presupposition を用いているギャズダーは、文脈を中立的かつ自立的に想定していると言えよう。

関連性理論の考え方は、主に聴者の側からのみ規定する点がギャズダーやジョンソン・レアードとは異なるものの、発話の解釈をおこなう際に「文脈」が規定されるとするので、発話ごとに文脈があるとすることになる。発話の単位をどう定めるかについてもさまざまな考えがあり得るが、発話が一人の話者が発する、（1 つ以上の）文あるいは命題からなる言語形式であるとすれば、発話ごとに異なる文脈を想定するわけである。

文脈を文あるいは命題の集合とする枠組みは計算可能な語用論を構築する上での方法論的便宜と考えることができるが、記述と分析をおこなう者は発話解釈に用いられた前提を文脈として遡及的にしか規定できないことを考えると、このように帰納的に規定される文脈の予測能力は限定的である。このような規定に基づく文脈を加藤（2007）に従って帰納的文脈（reductive context）と呼ぶことにしよう。

この種の帰納的文脈は、発話がどのように解釈され、どのような推意が引き出されたかを遡って確定する際には精密な分析をおこなうことができる点で非常に有効なものである。つまり、分析対象の「発話」を基点として定めれば、その解釈に必要な命題として「文脈」に含めて個別に決めることができるので、必要な情報を柔軟かつ無制限に取り込んで発話解釈のしくみをあきらかにできる。ただし、帰納的文脈では、発話について事後

の分析をおこなうことをもって、必要な命題を文脈に取り込み、不要な情報は除外することができるので、発話時点より前に、あるいは、発話生成に平行して分析をおこなうと十全な帰納的文脈とはならない。その理論的帰結として、帰納的文脈を用いると予測的な分析は行わないことになる。

しかし、会話参加者は、その場で発話の解釈をおこない、その都度推意を引き出しているのであって、文脈を帰納的に設定する立場は、時間を止めたりさかのぼったりして分析をおこなうという意味で、会話参加者の実態と見るべき線条的な処理を明らかにするものではない。自然な会話のやりとりの中で、聞き手が発話からどのように推意を引き出すかを考えるには、文脈がどのように構成されているかを事前に分類しておき、そこから予測可能な記述と分析をおこなう必要がある。これが、加藤（2007）ほかで提唱されている、演繹的文脈（deductive context）という枠組みである。演繹的に定義される文脈も想定することで、文脈にかかわるメタ的な標示をおこなうシステムを持つ言語についてはより語用論的な記述の精度を高めることが可能になる。つまり、会話参加者の認知処理ほぼ平行して記述することが可能であり、また、予測的な分析も行えるが、時間軸上で遡及的な分析はおこなわないため、必要十分な命題を過不足なく文脈に含めることは難しくなる。事前に、あるいは、発話に平行して文脈を設定することから、結果的に無駄な情報を含めたり、必要な情報を十分に取り込めなかったりする可能性があり、それは発話解釈や分析の完成度を低くしてしまううらみがある。

帰納的文脈と演繹的文脈のこのような関係は、じっくり時間をかければ完成度は高くなるが、ある程度の完成度でよければ時間をかけないでアウトプットが出せる、という、一般的なトレードオフの関係と見ることができる。それぞれ分析にいずれを重視するかの違いということもでき、いずれにもそれなりの利点と欠点があるので、一方のみが単純に優れているということもない。本論では、演繹的に文脈を立てることを方法論として採用し、それによって「文脈」をアプリオリに規定する枠組みを提案する。帰納的文脈と演繹的文脈は、上述の通り、それぞれに利点があり、相補的に利用すべきものだと考えられるが、本論で演繹的文脈を設定する理由を次節で述べる。

2. 言語の線条性と線条的語用論

帰納的文脈において、発話解釈の精度が高まるのであれば、聴者サイドからの発話解釈をもって全体の語用論的分析に代えたくなることは理解できる。しかし、実際の会話においては、会話参加者は発話命題がすべて提示された段階で、発話解釈をおこなうのではなく、相手の発話が始まった段階で順次解釈を進めていくのが普通であろう。現実の発話解釈は、それに先だって、発話における文構造の解釈があり、さらに形態素の同定と音素の同定があるとも考えられる。しかし、言語音を音韻処理し、音韻の連続から形態素を切り

出して、句や節を再構成し、全体の文構造を理解して、さらに文構造について発話解釈を重ねておこなうような手順を実際にわれわれが踏んでいるとは考えにくい。しかし、音声言語としての会話が時間軸上に展開していくことは事実であり、時間の線条性の制約を受けることは確かである。

少し細かく確認しておきたい。まず、線条性は、Saussure（1916）で広く知られるようになった概念であるが、ソシュール自身は線条性（linéarité）という語は用いず、線的特性（caractère linéaire）と表現している。

（3）　Le signifiant, étant de nature auditive, se déroule dans le temps seul et a les caractères qu'il emprunte au temps:　a）*il représente une étendue*, et b）*cette étendue est mesurable dans une seule dimension* : c'est une ligne. Saussure（1916, 1972: 100）

よく指摘されるように、Saussure（1916）はソシュール自身が執筆したものではないが、その後の影響力を重視して、ここでは特に区別しないで言及することにする。（3）からわかるように、ソシュールはシニフィアンが線条的であることを指摘しているのであって、言語全体やシニフィエなどが時間の線的制約受けるとは述べていないのである。シニフィアンは言語記号の音形に相当する[2]から、時間軸上に線的に展開するのは至極当然のことである。

シニフィアンに限らず、音声言語それ自体が音声を用いているという点で、時間の線条性の制約は受けることになる。つまり、要素の配列は一方向へのみであり、それは不可逆的であること、同一点に複数の要素が出現することは不可能であることが制約になるわけである。加藤（2006a）に従って、前者を①不可逆配列の原則、後者を②単層列の原則、と呼ぶことにすると、①に対する反論が Saussure（1916）の編者 Charles Bally によってなされている。

（4）　Les signes sont linéaires lorsqu'ils se suivent, sans se compénétrer, sur la ligne du discours.　Il y a non-linéarité ou *dystaxie** dès que les signes ne sont pas juxtaposés, lorsque, un signifiant contient plusieurs signifiés, comme dans le français *va!,* où une seule syllabe renferme l'idée d'*aller*, celles d'*impératif* et de *deuxième personne,* ou lorsqu'un signifié est représenté par plusieurs sig-

[2] ソシュールのシニフィアンは音形と理解するのが近い。というのは、ソシュールは、音素の連続としてシニフィアンを考えているわけではなく、音素にかぶさる要素（suprasegmentals）も想定していないと思われるからである。現在の言語学が当然のように設定する「音素（phoneme）」も 20 世紀半ばに定着し始めたもので、19 世紀末から 20 世紀初頭のソシュールの理論に取り込まれていないことに不思議はないと言ってよい。

> nifiants, comme dans *nous aimons*, où l'idée de première pluriel est exprimée deux fois; ou encore quand les parties d'un même signe sont séparées: *elle a pardonné: elle* ne nous *a* jamais plus *pardonné* etc., etc.[3] (Bally 1932, 1964)

一般に、va というシニフィアンのシニフィエは「(君は) 行け」という、aller の二人称単数命令法という全体であって、これを aller と人称・数・法などには分解されないが、よしんば分解できたとしても、それはシニフィアンの話である。そもそもソシュールは、シニフィアンが線条的だと述べているのであって、バイイのように記号 (signe) が線条的だとはまったく述べておらず、シニフィエが線条的であるとも述べられていないので、それを非線条性 (non-linéarité) として論じるのも適切ではない。もちろん、ソシュール以前に、思考や意味は時間の制約を受けないという議論はあったが (例えば、Manchester (1985))、これも本論では割愛する。このように不正確に理解している人物が Saussure (1916) の編者であることに驚きを禁じ得ないが、それは本論の関心ではない。バイイの造語 dystaxie は dys- で「不全状態・異常」を指し、taxie が「配列・順序」のことであるとすれば、配列に異常があるということであり、「反序性」という訳語も誤解を招く恐れがある。

バイイは、このほかに熟語や成句も線条的でないとして、tout-à-coup が soudain の意味になることを例に挙げている。tout-à-coup は tout「すべて」と à「に」(前置詞) と coup「一撃」の単純なシニフィエの和からその全体のシニフィエが得られるのではなく、これ全体が 1 つのシニフィアンとなり、それに対応するシニフィエとして「突然」を想定しなければならない。英語の out of the blue にしても、日本語の「青天の霹靂」にしても、これらを 1 つの言語記号と扱い、その全体がシニフィアンであって、それぞれに対応するシニフィエがあると考えればよいことになる。ただ、複数の形態素に分解できる成句や熟語と複合語は形態論上の成り立ちは似ているものの、意味的な特性は異なっている。それでも、音声や形態は時間軸上に可視的に配列されるために、バイイのような誤解が生じるわけである。意味もシニフィアンに対応する配列は考えられるものの、文意味は語意味の単純な和ではなく、文意味に対する解釈や推意となると、シニフィアンの配列は関係がな

---

[3] 参考までに、小林訳を引く。「記号は、それらが話線の上で、相互透入することなく、あい継ぐときは線的である．記号が並置されていなくさえあれば、非線条性すなわち〈反序性〉(dystaxie)* がある、たとえばフランス語の va! では、たった一個の音節が aller の観念と〈命令法〉および〈第二人称〉のそれとをふくむといったふうに、一個の能記がいくつもの所記をふくんでいるとき、あるいは複数第一人称の観念が二回表現されている nous aimons におけるように、一個の所記がいくつもの能記で表わされるとき、さらにまた *elle a pardonné* : *elle* ne nous *a* jamais plus *pardonné* といったふうに、おなじ記号の諸部分が引きはなされているとき、等々．」(小林英夫 (訳)．1970 岩波書店) なお、原著の * には、Du grec *dus*-, désignant un état anormal, et *tàxis,* <<alignement, ordre>>. L'adjectif correspondant est *dystactique*. という注がついている。

い。もちろん、提示される情報の順序は解釈に影響するが、シニフィアンそのものの不可逆で一方向的な配列性ほど厳密なものとは言えない。

解釈の観点から線条性を考えると、会話において、わたしたちはすべての発話が終わってから解釈を開始するわけではなく、発話が完了する以前に解釈を開始していると考えるべきであろう。ときには、解釈を動的に修正したり更新したりして、より精度の高い発話処理をおこなっている。帰納的文脈を用いる場合も、さかのぼってその時点での解釈処理を個別に分析することで、誤った解釈を検討対象にすることは不可能ではないが、事前に誤解や齟齬を想定しながら分析するわけにはいかない。つまり、帰納的文脈と演繹的文脈の最大の違いは、概念的に線条性を処理するか、現実の時間の流れに沿って線条性を処理するかの違いであって、この点のみをとっても、十分に演繹的文脈を用いる意義はあると考えられる。

文構造の解釈をやりなおすガーデンパス現象は一見すると、線条性に反するかのようであるが、文の内部における記憶領域において文全体が保持されていると考えれば、その領域内で全体を見ながら構造を判断したり、その判断をやり直したりすることができる。

(5)　太郎がタバコを吸っている …

例えば、もっと長い文の始まりの部分として（5）を耳にしたとき、多くの聴者は「タバコを吸う」の動作主として「太郎」を同定するだろうが、(6) のように文の全体像がわかれば、後続部を入力することで解釈を修正することになる。

(6)　太郎がタバコを吸っている高校生に注意をした。

文の解釈も発話の開始とともに始まり、(6) であれば、下線部に至って、「高校生」を主名詞とする関係節が「タバコを吸っている」であること、「太郎が」は関係節に含まれず、主文の述語「注意した」と呼応する主語であることが判明し、それに合わせて解釈を修正することになる。談話においても、文の連続があるとき、次の文を聞いて解釈が修正されたり、解釈が充足されたりすることはある。

(7)　【教員 A が先日の会議を欠席したことについて教員 B が尋ねる】
B1 「先日の会議のとき、急きょ病院に行かれるということでしたね」
A1 「ええ、うちの子の具合が悪くなってしまって」
B2 「ああ、それは大変でしたね。もう回復されたんですか」
A2 「いえ、そのまま死んじゃって。老衰だから仕方ないんですけど」
B3 「えっ。亡くなったんですか」
A3 「でも、20 年近く生きたので」

上記のやりとりでは、B2 の発話まで B は「うちの子」が A の実際の子供（人間）だと

考えている。A2 では、A の想定される年齢から考えられる人間の子供が老衰で死ぬということに B は違和感を覚えているが、「子供が老衰で死ぬのか」と不合理さを突くわけではなく、単に「亡くなったんですか」と疑問形式で応じている。この疑問形式は、純然たる疑問でも、加藤（2015）に言う不完全受容でもよいが、この時点で B は「うちの子」が A の実際の子供（人間）とする解釈を修正している。このあとで「うちの子」が A がかわいがっていた飼い犬であることが判明すれば、「病院」が人間が受診する一般的な医療機関ではなく、いわゆる「動物病院」であることなども修正が必要になる。このとき「病院」の解釈そのものは間違っていたわけではなく、「病院」として想定してものが典型的なもの（人間のかかる医療機関）ではなく、非典型的なもの（動物病院）だというだけで、文意味そのものの修正というわけではない。しかし、会話の中ではこのような解釈の修正はよくあるものである。「学校」という語が大学や専門学校を指すかと思っていたら、特定技能の職人を養成する学校や消防学校であったなど、発話解釈が修正されることは珍しくはない。

演繹的文脈は、時系列にそって発話がなされ、解釈がなされ、時にはそれが修正されていくさまをシミュレーションしたり、記録するように跡づけたりすることができる。これは、一定の予測能力も持つが、それは、現実の発話解釈が不完全なのと同程度に不完全であり、誤解やトラブルやその修復なども扱うことができる。時間軸上に展開する発話を時々刻々変化していく状況をたどりながらとらえていく上では演繹的文脈のほうが適しており、動的な記述と分析が可能である。これに対して、帰納的文脈はひとまとまりのやりとり（＝セッション）が終了してから全体を可視的にとらえて分析をおこなうという意味では相対的に静的である。また、次節以降で見るように、発話解釈のプロセスを心的プロセスとして記述する場合には、心理言語学の枠組みとも親和性が高い。最後にあげた点は枠組みや分析の重点とかかわるが、それ以外の点について 2 つの文脈を対比的に整理しておこう。

（8） 帰納的文脈と演繹的文脈の対比

帰納的文脈		演繹的文脈
なし	予測能力	あり
高い	発話全体の可視性	低い（発話時点以降は不可視）
非線条的	線条性	線条的
高い	分析精度	低い
発話の俯瞰的把握	特徴	心的過程のシミュレーション

以上の演繹的文脈の特性を踏まえて加藤（2006a, b）では、「線条的語用論（linear pragmatics）」という考え方を提唱しており、あわせて「動的語用論」という枠組みも提案して

いる。一般に、動的（dynamic）というと、形式意味論のうち、動的述語論理（dynamic predicate logic; DPL）をはじめとする動的意味論（dynamic semantics）を強く連想させるのではないかと思われる。また、Kempson *et al*.（2001）などの動的統語論（dynamic syntax）も系統的には形式意味論の流れにあると見てよいのならば、dynamic が形式意味論的な基盤を持つ研究の別名であるとする一般的理解が広くうすく存在していると考えておいた方がよいだろう。

しかし、ここで言う動的語用論（dynamic pragmatics）とは、形式意味論の手法や枠組みとはかかわりがなく、親和性も共通点もほとんど認められない。誤解を避ける上ではあまり適切な名称とは言えないと思われる。

加藤（2006a, b）で言う線条的語用論（linear pragmatics）は、以下の 2 つの特徴を持っている。

(9) ① 発話が時間軸上に線条的に展開する特性を重視する
② 発話の産出と発話の解釈が必ずしも鏡像関係をなさないという前提に立つ

もしも、加藤（2009）で想定するように、マクロ語用論の一領域を立てるのであれば、心理語用論（psychopragmatics）との親縁性が強いと考えられる。これまで、心理言語学における文理解（sentence comprehension）の研究は、構造の解釈・再解釈に力点があったと思われるが、同様の関心を持ちつつ発話解釈に力点を置くことでこれまで扱われなかった（あるいは、十分に検討されなかった）側面を扱うべき領域として「心理語用論」の意義を認めることができる。本論での趣旨を踏まえると、動的心理語用論あるいは線条的心理語用論といった名称が妥当だと思われるが、機会を改めて検討したい。

さて、上述の①の特徴は、発話や、発話を構成する文が未完成の段階でも、聴者が解釈を開始していると見れば、文理解が一義的な経路で完成するのではなく、選択と修正を何度も含みうる可能性を考えなければならないことを示す。また、②の特徴は、動的心理語用論が、話者と聴者のあいだに見られる認識のずれも捨象せずに、解明の対象に含めることを示している。

3. 発話解釈処理と記憶種別

ここでは記憶領域の種別と発話処理について検討したい。認知心理学で記憶を短期記憶（short-term memory; STM）と長期記憶（long-term memory; LTM）に分けることは長らくおこなわれていることであるが、実のところ、両者の機能や構造が心理学において必ずしも一義的に確定しているわけではなく、言語学、とりわけ語用論の研究に利用できるかどうかは検討を要する。認知心理学では、変異はいろいろ見られるが、記憶を 3 分類し、感覚器における瞬時の記憶たる直接記憶（immediate memory）に《短期記憶》と《長期記

憶》を加え、おおむね以下のように理解をすることが多い。

(10)

刺激は、感覚器に瞬間的に保持され、これを感覚記憶ないし直接記憶と呼ぶ。更にそれは短期記憶に転送され、その一部が長期記憶に転送されて、恒久的に保蔵される。発話処理の場合、言語音が感覚記憶に捕捉されることになるだろう。

記憶に 2 種類の部門を想定する考えは、James（1890）の primary memory と secondary memory からはじまり、20 世紀半ばから、電気信号の伝達である前者と神経細胞間の接続である後者という区分も提案され、前者を短期記憶、後者を長期記憶とする区分が一般化したという。その後、短期記憶を短期記憶庫と見る静的なとらえ方を批判して、作業記憶（working memory）と見なす概念が提案された（Atkinson and Schifrin 1968, 1971）。記憶という荷物の置き場として場所の比喩で捉える前者にたいして、後者では処理的なプロセスないし理解のしくみとして動的な機能に見立てているということが言えるだろう。

さらに情報工学の進歩に伴い、情報処理プロセスとして手順化して理解されるようになり、ある短期記憶仮説では、central executive（中央制御部）とその属下にあるスケッチ・パッド（sketch pad）[4] と音韻ループ（phonological loop）[5] が作業記憶を構成しているとされるが、Salamé and Baddeley（1982）では、これに一次音響貯蔵庫（primary acoustic store）を加える提案がなされ、4 つの要素からなる作業記憶を想定するようになった。

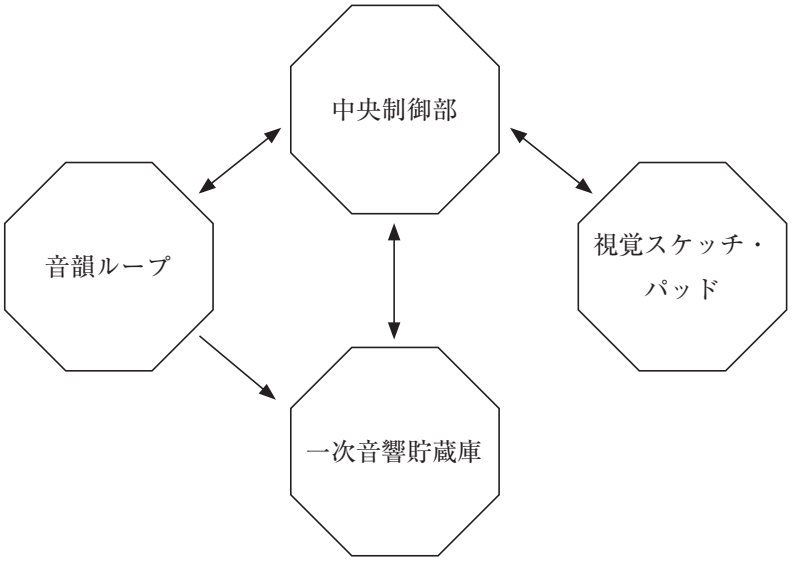
音韻ループは、「内なる声」とされ、一次音響貯蔵庫は「内なる耳」、視覚スケッチ・パッドは「内なる目」と説明されている。言語学的に見ると、音韻ループと第一次音響貯蔵庫が、音韻部門と音声部門という分け方になっていない点、音韻ループだけが一義的に発声のためのものである点、音韻的（phonological）としているが音声的（phonetic）としている文献もあり、音声と音韻（音声学と音韻論）が区別されていない点、形態処理と意味処理に関する部門が欠けている点がなど、言語学から見ると、問題となる。以下の図は、Eysenck（1986）を参考に引用者が簡略化したものであり、言語処理の観点から示唆するところも少なくないものの、言語学的な基盤に合わせて調整し直す必要もある。なお、短期記憶については、このほかに有意味性（meaningfulness）を「処理の深さ」（depth of processing）と見る考えなどもあるが、ここでは触れないでおく。

---

[4] あるいは scratch pad, visuo-spatial scratch pad, visual-spatial sketch pad などとも表現されている。ここでは「（視覚）スケッチ・パッド」と訳している。

[5] articulatory loop とも表現され、訳語には「音声ループ」も混在している。

(11)



長期記憶についても、陳述的記憶（declarative memory）と手続き的記憶（procedural memory）という区分が立てられている（Anderson 1980）。出来事や知識の記憶である前者に対して、後者は運動技能や習慣に関わる身体的な記憶である。さらに、陳述的記憶は、意味記憶（semantic memory）とエピソード記憶（episode memory）を区別され、近年いくつかのデータからこの区分が重要であることが確認されている。

言語学的に見ると、陳述的記憶という名称は奇矯な印象を与えるが、この記憶領域に収蔵されている情報は declarative sentence（陳述文）という形式をとっていると考えられているためであろう。文の形式をしており、文法論で言う大まかな「命題」としての内容を備えているものと見れば、「水は 1 気圧では摂氏 0 度前後で凍結する」のような無数の陳述文の集合が陳述的記憶ということになる。とはいえ、記憶領域における実際の収蔵のあり方が文形式であることは実証しにくい。単に、記憶を取り出して言明する際には文形式をとらざるを得ないということかもしれないが、文形式で収蔵されているとしておいて不都合はないだろう。もう一方の手続き的記憶は、ことばによらない身体の動きを手順化して習得した技能を主に指しており、人間が「泳ぐ」ことができたり、「自転車に乗る」ことができたりするのがよく手続き的記憶の例として挙げられる。言語学的に見れば、言語習得の過程で特定の音連続ができるようになるのも、ある種の手続き的記憶として習得した結果だといえるだろう。この点はまたあとで触れる。

陳述的記憶の下位区分としての意味記憶は「知っていること」の内容であり、エピソード記憶あるいはできごと記憶とは「覚えていること」の内容で特定時に特定の場で生じたできごとに関する記憶の集積である。エピソード記憶は人間に特有のものであるのに対し、意味記憶は人間以外の動物にも見られると考えられることが多いようだが、現実の経

験をことばで語ろうとすることにエピソード記憶がかかわるなら考えうる説ではあるものの、記憶の神経系のなかでそれほど明確に区分できるかについては確定的なことは言えないだろう。

エピソード記憶は、個々人の記憶が基体になっているので個人的なものである。しかし、学習により取り入れた知識も同じようにできごとの記憶であり、同様に扱うことになる。「徳川家康が江戸幕府を開いた」といった情報も命題の形をしており、実際に目撃したわけではないが同じように記憶として蓄積される。もっとも、現実に体験したことであっても、記憶そのものが再生されるなかで再構築されたり、他の記憶や知識の影響で変容してしまったりすることはあるので、学習によるのか実体験によるのかはさほど重要ではないかもしれない。[6]

また、近年、主に長期記憶において、記憶しようという意思のもとで記憶する explicit memory と、無意識のうちに記憶してしまう implicit memory を区別することが行われ、神経心理学的な実証も継続的に提示されているようであるが、本論では扱わない。[7]

本論が関心を持つのは、人間が日常的にことばのやりとりをする際に、発話の処理を行う上でどのように記憶領域が関わっているのか、どのようなシステムを考えればうまく記述できるのかということである。筆者自身は心理学の各専門領域にはまったく味い門外漢なので、心理学の成果を論評するつもりはなく、もちろんその能力もない。ただ言語研究に必要な理解、語用論の枠組みとして求められるあり方について、言語学、特に語用論の観点から検討を加え、必要なしくみを構築したいのである。

Givón（2001）では関係節構造における修飾部についてエピソード記憶のアクセスを行うものと規定しているが、議論の見通しをよくしておく上では、意味記憶とエピソード記憶の関係も整理しておくべきだろう。

長期記憶には私たちが獲得してから永続的に保持する知識や情報が収蔵されていると考える。情報や知識は更新されてより精密かつ確実に保持されるかもしれないが、獲得した当初の情報や記憶が徐々に緻密さや確実さを失って質の劣化を見ながらとどまっているかもしれない。記憶の負担と保持はトレードオフの関係にあると考えるのが常識的だろう

---

[6] 犯罪の目撃記憶が繰り返し語られる中で重要でないことが脱落したり、重要とみなされていることがより重大な出来事として再構成されたりすることが知られている。また、質問や聞き取りの中で相手の期待に応えるようにストーリーの一部を変容させたり、あとから知った情報が当時の出来事に組み込まれるという非論理的処理（例えば、「知らない人」の目撃行動を語る際に、その自分が悪い人だと知ることによって、悪意ある行動であると叙述される）がなされたりすることが知られている。

[7] なお、以上の記述には、既に触れた文献以外に、浮田・賀集（編）（1997）、苧阪（2002）、田中・橋本（1999）、中條（2001）、村井・濱中（1999）、吉益（1999）、Wilson and Keil（ed）（1999）などを参観している。

が、この点はあとで触れる。ここでは、以下のように暫定的に記述しておく。

（12）　世界知識は、会話参加者がセッション開始以前から有する知識の総体で、長期記憶内に構築された永続的記憶群である。世界知識は不断に更新され、個別特殊なものから一般普遍なものまでさまざまな知識を含む、有機的な合理体系をなす。理論上容量に限界はないが、利用できる状態に活性化できる容量には制限がある。

なお、(9) で「永続的」と表現しているのは permanent の意味で長い間保持されることを意味している。世界知識の持ち主たる個人がなくなるまで一生涯保持していてもよいが、一定期間の後に消失することもあり得る。長期記憶のなかには、意味記憶と言われるいわゆる語彙に関する記憶もあるが、言語学的には統語規則等も別に存在していると考える。つまり、言語記憶という言語に関する記憶カテゴリーを立て、そのなかに統語規則や音声・音韻に関するいわゆる文法知識を収蔵する領域と、語彙に関する知識を収蔵する領域を設定することにしたい。グラマーとレキシコンに知識が分離できるかと言えば、最終的に明確な境界線は引けないと考えるが、記述上区分できるレベルと範囲では、区分しておく方がよいだろう。

ここまでの議論を整理して以下のように表にしておく。この区分はあとで再度修正するが、(13) が心理学の成果を言語研究が活用できるように捉え直した形と言えるだろう。

（13）　長期記憶の下位区分

<table>
<tr><td rowspan="6">長期記憶</td><td>身体的記憶</td><td colspan="3">手続き的記憶</td></tr>
<tr><td rowspan="5">陳述的記憶</td><td rowspan="2">できごと記憶</td><td rowspan="2">世界知識</td><td>経験的できごと記憶</td></tr>
<tr><td>学習的できごと記憶</td></tr>
<tr><td rowspan="2">意味記憶</td><td rowspan="2">言語知識</td><td>語彙知識</td></tr>
<tr><td>文法知識</td></tr>
</table>

4.　言語研究のための記憶領域設定

短期記憶（short-term memory; STM）は、作動記憶（working memory）[8] と同一視され、両者を単に観点が異なるだけで指示対象が全く同じものに対する呼称と扱うことも珍しくないようである。山下（1999）では、当初「注意」に重点があった「短期記憶」の概念が「作動記憶」では下位システムを持つ情報保持の機構と理解されるようになったとし

[8]「作業記憶」あるいは「ワーキングメモリー」といった訳語も用いられる。

ている。音韻ループは、音声的な情報をそのまま 2 秒程度保持しているだけとされている（山下 ibid.）。当然のことながら、STM は LTM との保持時間の差異に着目しているもので、作動記憶という捉え方は、処理プロセスの特性に着目しているものだと言うことができる。以下では、この点も踏まえて検討を加えたい。

4.1. 処理記憶

言語学から、これらの記憶モデルを見た場合、いくつかの言語学的知見と原理を考慮に入れたモデルにする必要がある。もちろん、知的処理において言語が関わるのはすべての局面ではなく、記憶のシステムの全体に関わるとも言えないが、一般言語学と一貫性を持ちうるモデルを考えたい。そこで、まず言語学的に考えて、情報の保持がどのようなものでなければ、合理的な記憶システムと見なせないか、という観点から以下論じる。

（14） 知覚した言語音から音素を抽出するには、音韻体系に関する言語知識を参照する必要があり、音素の連続から形態素を抽出するには、語彙や形態に関する言語知識を参照する必要がある。形態素の配列や呼応、統語スコープなどの統語構造解釈にも言語知識を参照しなければならない。

伝統的な言語学の知見には、Martinet（1970）の言う二重分節がある。もっとも、言語が要素の組み合わせで階層性をつくるのだとすれば、2 階層に限定する必要はなく、音素から形態素、句、節、文、談話といういくつもの積み上げ階層を想定するかたちで規定するほうが、実態に即していると考えられる。しかし、要素の多重な組み合わせという構造を持っているのは言語そのものであって、それを使用者が同じ手順で処理しているとは考えるべき根拠はない。少なくとも、われわれは自覚的に音素処理や形態素処理を回帰的に行ってはおらず、瞬時に発話の解釈を遂行する現実を踏まえると、総合的に処理していると考えるのが妥当だろう。とすれば、（14）は（15）のように改めることになる。

（15） 知覚した発話を処理するには、言語知識を参照しなければならない。発話処理は、総合的に行われる。

発話は問題なく処理されれば、音声や音素、形態素や構造などのレベルの処理を意識することはないのが普通である。もちろん、相手が鼻濁音を使うかどうかに留意して聞けば、音声をプロファイルすることは可能であり、聞き慣れない語や表現に注意を払うことも可能である。母語・母方言以外では、音声や音素・形態素、あるいは、構造などについての処理がうまく行かない（長期記憶に参照すべき知識が収蔵されていない）こともあり、発話処理以前の段階で止まってしまうことはあり得る。

私たちは、通例、発話を行った相手が無意味な音連続を発するわけがない、と信頼しており、相手の発話が解釈可能なものであるという事態が成立することはコミュニケーショ

ンにおける最低限の必要条件である。これは、原則（principle）と言うよりも、公理（axiom）に近いものとして位置づけておくべきだと考えられるので、暫定的に《解釈合理性の公理》(axiom of rational interpretability）と呼ぶ。[9] この点は、機会を改めて論じる。

さて、聞き取った発話の音声や形態が適切に処理できないときは、正しく処理するために、発話をできる限りそのまま保持する必要がある。

（16）　発話の解釈処理がなされるまでは入力した言語形式を当初捕捉した状態のまま情報を保持しておく必要がある。しかし、原初形式を未処理のまま長時間保持することは大きな負担であり、保持できる容量にも限界がある。処理後は、原初形式のまま保持する必要がない。処理後は文脈として保持できればよい。

日常のやりとりの中では、相手が言い間違えたり、変わった話し方や不正確な発音をしたりすることもある。それがきわめて特徴的で興味深ければ、私たちはそれをなるべく正確に記憶しておこうと意図して保持につとめることもある。しかし、文字で記せば「あのね」でしかないような談話標識も、イントネーションやアクセント、調音時間の長さやピッチ、声の特徴などまで正確に保持しようとすれば、相応の認知的負担が生じる。

私たちは、相手の発話の音声を録音するように、あるいは発話に伴うパラ情報（表情やジェスチャ、視線など）もあわせて録画するように、保持しておくことは不可能でないが、それはごく短い時間の一部だけであり、保持しようとしても記憶は徐々に劣化してしまう。発話の直後であれば相手の発話を忠実にまねて再現することができても、時間が経てば再現の忠実さが低下することは私たちが日常的に経験するところである。

発話ももともとは音声連続であり、それにメタ情報やパラ情報が伴っている。いわゆる文理解にあたる心的処理をおこなうために入力形式をそのまま保持しておく領域として処理記憶（processing memory）を設定することにする。処理記憶は、言語の構造解釈や文意味の抽出が終わるまで、聞いたとおりの言語形式をできるだけ忠実に保持しておく領域である。もちろん、当初の言語形式は、超分節素にあたるものやメタ的要素・パラ的要素を含んでいるので、そのまま保持することは大きな負担であり、現実的には数秒程度の発話を収蔵しておき、処理が済めば保持する必要がなくなると考えればよい。この処理記憶は、保持時間だけをとれば短期記憶に近いように見えるかもしれないが、最終的な領域群の仮説を見れば、単純な対応で考えない方がよいことがわかる。

言語形式としての保持の負担を効率的に減少させるには、より重要な特徴だけを残し、相対的に重要でない特徴は捨象していくという方法が考えられるが、ほかに、メタ情報を

[9] 数学的な厳密さで「公理」と称するべきかについては、別途検討を加える必要性がある。また、本論は特に「公理」という呼び方に拘泥するものではないので、数学における定義と同じものとして「公理」と呼ぶべきでなければ、混乱しない名称を創出するべきだろう。

言語的に付すことで特性の保持を代替するという方法があるであろう。前者は、声の特徴やイントネーションなど相対的に重要と思われる点を残し、それ以外は正確な保持を放棄することなどがそれにあたり、やり方によっては当初の言語音をデフォルメすることで保持することにもなる。後者は、「あのね」を形態素レベルにしてしまい、それに「まるでおじいさんのような口調で言った」あるいは「○×弁のようなイントネーションで言った」というメタ情報を付すという方法である。これは、前者のやり方と違い、情報全体が言語形式化しているために保持しやすく、検索や再利用が容易という特徴がある。

4.2. 談話記憶

問題点として取り上げるべきものとしては、さらに以下の 2 点がある。

（17） 発話のやりとりを円滑に進めるには、解釈処理済みの情報をやりとりが終わるまでの間保持しておく必要がある。ここでいう「解釈済みの情報」とは、当初捕捉した言語音が文意味や文構造の抽出処理（アブストラクション）を経て、効率的に保持できる状態になっている意味内容を指しているが、やりとり（＝セッション）が続く限り、解釈済みの情報を保持していることは会話参加者の義務である。セッションの終了後、解釈済みの情報は、保持する必要がなければ世界知識に組み込まれることはなく、保持する必要があれば世界知識に組み込まれ、長期記憶の一部をなすことになる。

（18） 発話の解釈には、言語知識だけでなく世界知識も参照する必要がある。ここでいう世界知識は、レキシコンなどの言語知識以外の記憶で、不断の更新がなされる、開かれた知識体系であり、原則として体系としての合理性が保たれ、一貫性が崩壊しない必要がある。一方、言語知識は、言語習得期までは開かれた知識体系であるが、徐々に閉鎖性が強まり、世界知識ほどの柔軟性がない知識体系となる。

処理が済んだ後に、処理前のデータと処理後のデータの両方を保持しておくことは、再度処理をし直すことが容易になるという意味では意義がある。しかし、有期の記憶に容量的な限度が考えられること、保持停止の時点をほかに設定しにくいこと、処理のし直しが発生する頻度に対して保持する情報量が大きくきわめて非効率なしくみになること、などを考え合わせると、一旦処理が済んだ時点で保持状態の指定を解除すると考えておくべきである。再解釈に必要なデータの復元や遡行的推定は解釈後のデータからでも可能な場合が多い。例えば、[sæ:go] という言語音を「最後」という語形に解釈したあとは、この言語音をそのまま保持することなく放棄してもよいことになる。しかし、当初の言語音を保持していない状態になって（要するに、忘れてしまい、正確に覚えていない状態になって）、「最後」と思った語形が実は「生後」の聞き間違いであったと考えれば、/saigo/ と

/seigo/ は形態が類似していると遡行的推定を行うことも可能である。

未処理の言語音声を音韻レベルへ、音韻レベルを形態レベルへ、形態レベルから構造を確定する統語レベルへ、文構造から発話意味を確定する意味レベルへ、それぞれ次のレベルに処理が進むことをここでは抽出（abstraction）と呼ぶ。ここでは、伝統的な言語学の知見も踏まえて、音韻・形態・統語・意味という 4 つのレベルを暫定的に想定するが、実際の処理は最終的な出力形が得られればよいので、必ずしも順次処理をおこなう必要はない。但し、ここではモデルとして理論的な基盤を構築するための手順として設定するにとどめ、我々の認知処理としての実態の中では、そのような段階を踏んで処理しているわけではないと考える。むしろ、個々のプロセスではなく、1 つの統合的な領域において特に区分することなく必要な処理が総合的になされているとするのが現実的には妥当であろう。そこで、言語学的に次のレベルに処理が転送され、その個々のレベルで重要な情報形態に調整されることを機械的抽出（mechanical abstraction）と呼び、理論的な概念にとどめておく。ただし、聞き取った言語形式からその文意味を取り出したり、発話意味（推意なども含む）を取り出したりすることは現実的にあり得る。必要があれば、音素や形態素を取り出すこともできるだろう。音素・形態素・文構造・文意味・発話意味を取り出すことを個別に、それぞれ音韻的抽出、形態論的抽出、統語論的抽出、意味論的抽出、語用論的抽出として設定しておく。既に述べたように、これらが別々におこなわれていると考えるのではなく、総合的になされていると本論では考えるが、言語学的分析の便宜を考えて区分できるようにしておく。

本論で提案するもう 1 つの「抽出」は、分析の概念ではなく、いわば情報を記憶領域で保持する際に、情報が保持できるように情報の精度を低下させる変化で、こちらは意図的な処理ではなく自然に生じる変化なので、自然的抽出（natural abstraction）と呼ぶ。これは、談話記憶や知識記憶で見られるものなので、それぞれ個々に論じる。

なお、「セッション」（session）という用語についても、簡単に確認しておきたい。ここでセッションと呼ぶのは、「やりとり」の開始から終了まで言語行動の全体である。もちろん、実際の分析においては、どの時点を開始と見なすか、どの時点を終了と見なすかといったことに厳密な定義が必要な場合もあるであろう。本論では、今後修正する余地を残しつつ、以下のように考えておきたい。

（19）　セッションとは、「やりとりの開始から終了まで言語行動の全体」であり、最初の発話開始点をもって始まり、最後の発話終了点を持って完了する。セッションが開始してから、話題が転換するなど、一連の発話を内容と一貫性と統合性などの観点からより小さい単位に区分することも可能であり、セッションの内部におけるより小さい単位をパラグラフ（paragraph）と呼ぶ。1 セッションは 1 つ以上のパラグラフからなり、1 パラグラフは 1 つ以上の文からなり、1 つの

文は 1 つ以上の単語からなる。

セッションは、二者の会話のみに適用されるわけではなく、十数名のやりとりでもよく、会話参加者が途中で変わる（抜けたり、加わったりする）こともありうる。文章を読む場合は、読み始めから読み終わりまでの読み手の動作が 1 セッションをなすことになる。

語用論の研究の観点からの記憶領域設定の議論に戻ろう。(16) に言うような、会話のセッションの間保持されなければならない情報がある。これは、いわゆる言語形式を用いて情報化された文脈である。これは、単純に見れば、発話の蓄積であるが、言語形式を用いて顕在化されたものであるところから、形式文脈（formal context）とここでは呼ぶことにする。形式文脈は顕在的なもので、会話参加者が共有していることが前提（加藤 2006b, 2009）になっている。例えば、A と B の二人が会話していて、A が「僕は風邪を引いていて体調が悪いんだ」と言ったとすれば、二人のセッションが終了するまで、この情報は保持されなければならない。一般に、自分についての情報を披露した A がこの情報を失うことはないが、聞き手として情報を得た B も原則として保持していること、忘れないことが求められる。万が一、この発話を受容しておきながら、数分後に、B が「君、体調が悪そうだね。風邪でも引いているんじゃないの？」と A に言ったとすれば、形式文脈をセッション参加者が共有保持するという義務（＝形式文脈共有義務、加藤 ibid）に違反することになる。セッションの形式文脈とそれに関連する状況文脈などが収蔵される記憶領域を談話記憶（discourse memory）と呼ぶ。

談話記憶は 1 つのセッションの開始とともに生じ、セッションが続く限り保持される。長時間の話し合いなどを想定すれば数時間（場合によっては十時間以上）情報が保持される記憶領域ということになる。もちろん、長時間にわたって大量の情報が入力されれば、正確に保持されず、一部失われてしまうことも考えられる。大量の情報を保持するには、重要な情報や強い関心を持つ情報、あるいは保持しやすい情報を保持し続ける一方、そうでない情報は質を落としたり、情報そのものを喪失したりして容量を確保しなければならなくなる。端的に言えば、おおまかに覚えておき、些末なことは忘れながら、全体として必要なことだけは守るということであり、これは記憶の劣化という面があるものの選択的保持という面もある。これが、談話記憶における自然的抽出である。

談話記憶には処理記憶を経て解釈処理の済んだ情報が順次送り込まれる。セッションが続く間は自然的抽出は生じるものの、おおよそ情報は保持されており、それらの情報はいつでも発話解釈に使える状態になっている。この「発話解釈にすぐに利用可能な状態」のことを情報が「活性化されている」「活性的だ」と言うことにする。つまり、談話記憶の情報はいずれも活性化されていることになる。

4.3. 知識記憶

「世界知識」（world knowledge）とは、セッションが始まる前から存在している記憶で、いわば世界に関する知識の総体である。「世界知識」は最終的には個人的なものだが、人間として共通する普遍的知識（例えば「生き物は死ぬ」など）もあり、文化的知識などいくつかのレベルの共同体で共有される知識もあり、さらに家族など小規模の共同体でしか共有されない知識もあり、もちろん本人しか知らないような知識も含んでいる。これは、トップダウン的に設定していくやりかた（イーミックなとらえ方）もあるだろうが、本論では、エティックに世界知識を捉えてボトムアップ的に設定する方法論をとる。すなわち、まず、「世界知識は個人が持つ、世界に関する知識の総体である」とし、「そのなかには共有されているものも共有されていないものもある」と考える。共有のレベルで分けて階層化することに意味がないわけではないが、特定個人しか知らないことが急速に多くの人が共有する知識に転じることもあり、共有度を過度に重視すべきではないと考える。

さて、発話の意味解釈を十分に行うには世界知識と言語知識の両方が必要である。「世界知識」も「言語知識」も、新しい情報がもたらされることによって、知識が拡充されたり修正されたりすると考えられ、常に更新されうると見られるが、言語知識には一旦習得してしまえば統語規則のように新たな追加が通例行われないものもある。また、世界知識と同じように、個人ごとのエティックな知識として言語知識を想定すると、我々は言語習得の臨界期を過ぎても少しずつ語彙は拡充して行くのが普通である。しかし、常に語彙習得をおこなって言語知識を更新しているとまでは考えにくい。つまり、言語知識を、完全に硬直化して追加も修正もできないものと見なす必要はないものの、世界知識のように不断に更新されていると考えるべきでもないということになる。言語知識は、世界知識が完全に開放系であるのに対し、領域によって異なるもののおおむね閉鎖性が強く、語彙体系などある程度の開放性が認められるところもあるが、統語規則など閉じた体系になっているところもある、と見ておくべきだろう。これらの知識のある場所をここでは「知識記憶」と呼んでおく。

知識記憶には世界知識があり、世界知識は先に述べたできごと記憶からなっているが、自分が経験して獲得した情報なのか学習によって得た情報なのかは、その情報の精密さや鮮明さにおいて違いがあると考えられるものの、単純な境界線は引きにくいのではないだろうか。30 年前に訪れた観光地の情報と昨晩テレビで視聴した観光地の情報では、前者が直接的ではあるものの、鮮明さや精密さにおいてまさっているとは限らない。長く収蔵されていると、単純な区分がしにくくなるとここでは考えておく。同じように「柴犬」や「りんご」など、触ったり食べたりした経験がその語彙的意味の一部を形成している可能性を考えると、世界知識と言語知識の間にも整然と境界線を引くことがためらわれる。先の（10）の長期記憶の下位区分は、語用論的分析の枠組みとして、以下の（20）のように整理し直したい。

知識記憶は厖大なので、全体が活性化されているとは考えにくい。しかし、言語知識の多くは活性化されているか、刺激によってすぐに使える状態になる半活性の状態にあると考えられる。世界知識は、セッションが始まれば、活性化が始まるが、厖大な情報の多くは活性化されないままで、いわば眠っていると見ていいだろう。ここでは、セッションが始まり、発話解釈をおこなうに際して必要な情報や必要と見込まれる情報が、世界知識内で活性化され、談話記憶に送られると考える。

（20） 知識記憶の下位区分

<table>
<tr><td rowspan="2">知識記憶</td><td>身体的記憶</td><td colspan="3">手続き的記憶</td></tr>
<tr><td rowspan="2">陳述的記憶</td><td>できごと記憶</td><td>世界知識</td><td>経験的できごと記憶
学習的できごと記憶</td></tr>
<tr><td>意味記憶</td><td>言語知識</td><td>語彙知識
文法知識</td></tr>
</table>

総じて、語用論的には、以下のような記憶領域を設定することになる。

（21）

5. 3 つの文脈種別と記憶領域

演繹的に定義される文脈としては、すでに述べたように、形式文脈（formal context）、状況文脈（situational context）、知識文脈（knowledge context）を考える。なお、以下で基準点というものは、談話が線条的に展開していく上で想定される基準的な一時点のことである。進行中の談話における「現時点」や、分析対象のセッションに置かれた視点の位置がおおむね基準点に相当する。この 3 区分は、筆者が必要に迫られて設定を考えたものであるが、すでに Ariel（1990）に同種の 3 区分が挙がっている。[10] Huang（2007）、Cutting（2007）ほかにも同様の 3 区分があるが、簡単な既定にとどまっており、発話処理や記憶領域との関係に言及したものはない。

Huang（2007）で言う linguistic context が本論の形式文脈におおむね相当し、physical context はおおむね状況文脈に相当するが、本論で言う状況文脈のほうがやや含む範囲が広い。また、situational context は Crystal（2003[5]）が言うように、非言語的な情報を広

[10] 加藤（2003, 2004）では述べているが、管見の限り初出は Ariel（1990）である。そこでは、詳しい議論はなく、単に名称が言及されているに過ぎない。

く一括して指して用いられることがあり、その場合には、セッション参加者の知識や信念なども含むことになるが、本論でいう状況文脈は物理的に存在する外的状況の理解や解釈のみを指す。また、Huang（2007）の言う general knowledge context が知識文脈に相当すると言ってよいが、これも詳しい説明はない。Langacker（1987）の百科全書的知識は本論の世界知識よりやや広い規定になっているが、おおむね同じと言ってよさそうである。

帰納的な文脈がすべて発話の解釈や推論に関わる実体的なものであるのに対して、ここで言う演繹的な文脈は、発話の解釈や推論に関わる可能性があるだけであり、中には実体化されていないものや解釈・推論に利用されないままのものも含んでいる。その意味では、帰納的な文脈が実体的なものであるのに対して、演繹的な文脈は潜在的なもの、理論的なものだということができる。ここでは、以下のように規定しておく。

（22）　形式文脈とは、同一セッションの内部で言語的に具体化される発話の連続的な蓄積からなる。原則として、セッション参加者が共有していなければならないものであり、命題の形で談話記憶に蓄積できる陳述性の記憶である。その意味では形式性・客観性が高い。ただし、談話記憶内に膨大な量を収蔵しておくと自然的抽出が生じうる。

（23）　状況文脈とは、セッションの進行と時間的に平行して存在する物理的な状況についてのセッション参加者の認知と解釈に基づく情報の集合である。原則として、セッション参加者が共有可能であり、命題の形にすることができるが、その度合いは一定でない。談話記憶内に収蔵される。認識が容易なものは共有度が高く、共有も義務的であるが、容易に認識できないものは共有の義務も低い。物理的状況が共有されていなければ、得られる状況文脈も共通されない。

（24）　知識文脈とは、セッションが開始する以前から、セッション参加者が持っている知識のうち、言語知識を除外した世界知識にあたるものである。世界知識全体が個人間で完全に一致することはないが、共有度の高いものも少なくない。原則として命題の形で集約されている膨大な知識であるが、あまりにも膨大であるために、すぐに推論や解釈に使えるとは限らない。推論・解釈に使える状態に活性化されているものが知識記憶領域から談話記憶領域に送られると考える。知識記憶内にあっても活性化されていない情報はすぐには解釈に使えない。

これに、形式文脈と知識文脈、また、状況文脈と知識文脈など複数の文脈を利用して、あるいは、知識文脈の内部で、推論を行うことで新たに得られる想定を加えることができる。二次的な文脈（＝高次文脈）と見て、これに加えることもできる。

6. 《過剰な活性化》と《文脈逆成》

セッションの場で得られた発話の言語形式は、処理記憶を経て解釈処理され、談話記憶に送られる。聴者として他者の発話を処理する場合は、言語知識や世界知識や談話記憶の情報を参照することになる。話者として自分自身の発話をどのように処理するかについては、ここまでで細かに検討していないが、みずからの発話であることから半ば処理が終わった状態で入力され、ほとんど解釈処理の負担なく談話記憶に送られると考える。もちろん、自分の発話であってもモニターしている面があるから、想定したものと異なる言語形式であった場合（言い間違いなど）は、会話分析でいう修復が必要になる。そのようにして処理記憶から送られて談話記憶に蓄積されるものが形式文脈である。

ただし形式文脈も厖大になると、機械的に正確に保持するのは負担であり、要するにどういう内容なのかがわかればよく、重要な点が保持できればよい。その際には、詳細な情報は捨象され、保持されやすい状態に変化していく《自然的抽出》が生じる。

セッションが進行する物理的な空間にある情報を参加者が個々に解釈して理解したことは談話記憶に状況文脈として送付される。これは、視覚・聴覚・味覚・嗅覚・触覚を使って得た非言語情報を言語化したものであるが、看板や貼り紙を見るなど文字情報も含まれる。文字情報が必要であれば処理記憶を通って談話記憶に送られる。おおむね状況文脈は共有されているが、一方だけが気づいていて他方が気づいていないこともありうる。

会話参加者が知っている世界知識は厖大であり、処理記憶や談話記憶の情報をトリガーとして関連する情報が活性化され、談話記憶に送られる。厳密に言うと、談話記憶に情報を送ってもその情報は知識記憶・世界知識から消失・削除されるわけではないから、コピーされると言うべきだろう。談話記憶では、活性化された世界知識である知識文脈と状況文脈・形式文脈を使って二次的に得られた推論も存在できる。これらの文脈情報を使って、語用論的な解釈がなされるわけである。

ここでは、文脈と記憶領域に関連して、2 つの考え方を提案したい。1 つは、私たちは、発話の解釈にあたって、必要と見込まれる情報をひととおり談話記憶に世界知識から送り込むとする考え方である。これまでの、語用論における解釈の捉え方は、解釈は合理的になされ、必要最小限の文脈が用いられるとすることが多かったが、それとは逆の考え方である。必要最低限の文脈だけを活性化するには、そのあとの展開が正確に予測できていなければならないが、日常の会話では会話の展開は正確に予測できない。台本がある演技であれば、先の展開を知っていることになるが、それは自然発話とは異なる。帰納的文脈は結果として必要な解釈をあらかじめ知っているので、無駄な要素をはぶいてできるだけ効率的な解釈のなりたちを考えることができる。しかし、オンタイムの会話では、先の展開はわからないから、とりあえず使えそうな情報や関わりのありそうな情報は、多く活性化しておくと考えられる。その多くは、先の展開ではつかうことがなく、いわば無駄撃

ちになるようなものである。しかし、演繹的な文脈論では、結局使わない情報も含めて大量に活性化すると考える。これはいわば《過剰な活性化》で認知処理の無駄が多く含まれる方略であって、今後議論が必要だが、これまでの効率的な文脈論とは異なる非効率的な文脈論としてその可能性を考えたいと思っている。

もう 1 点は、分析の手順である。いままでの語用論的分析では、話者と聴者、セッションのなされる状況、関連する双方の世界知識などあらかじめ文脈がわかっているところに発話が生み出され、その発話解釈を行うとすることが多かった。いわば、文脈の中に発話が生み出される《文脈先行論》である。しかし、私たちが解釈を行う際には、文脈情報が足りないこともある。すべての場合に、話者の性別や年齢や職業、あるいは世界知識がわかっているわけではない。文脈がまったく、あるいは、ほとんどないところに生み出される発話は解釈できないかというと、解釈が一義的に確定はしないものの、一定の解釈が可能であることは、私たちが日常的に経験するところである。このときは、発話そのものから文脈情報を復元し、足りない文脈情報を補うという認知処理を私たちは行っている。語形生成の際に、派生形に見えるものから実は存在しない基本形を生成する、形態論的な「逆成」（back formation）に準えて、このような語用論的操作を《文脈逆成》（contextual back formation）と呼びたい。[11]

文脈逆成は、広告のコピーの解釈（発話者の属性や発話状況が不明で、文脈状況が大きく欠落している）や、俳句や和歌の解釈などで典型的に見られ、文脈逆成それ自体の創造性が文学的創造性の基盤になっているということができる。翻って、日常の会話のやりとり（セッション）においても、文脈がなんらの不足なく十全に揃っているわけではなく、発話から、あるいは発話と利用可能な文脈から、私たちは必要な文脈を生成していると考えるべきだろう。文脈逆成は、日常的に、無駄になる可能性が高くても、文脈として活用される見込みが多少なりともあれば活性化する、語用論的な処理があってはじめて可能になる能力だとも言える。言語研究は、以前ほど文学研究と密接な協力関係を形成せず、どちらかというと、両者は離れがちだと言えるが、文脈逆成から文学研究への語用論的貢献の可能性を探ることも可能だと思うのである。

7. 終わりに

紙幅の都合もあり、本論で述べた内容をここでは繰り返さない。講演[12]において触れた

[11] 逆成は、typewriter から typewrite という動詞を生成するような語形成を言う。なお、呂（2015）では同種の概念を「文脈創成」と呼んでいる。

[12] 本論は、第 19 回日本語用論学会（2016 年 12 月 11 日・下関市立大学）における会長就任講演を再構成して論文化したものである。

例やエピソードも割愛したが、演繹的文脈と 3 つの文脈種、語用論的に設定する記憶領域、また、その関係は一通り述べることができた。また、そこから得られる《過剰な活性化》と《文脈逆成》は、概要の提示にとどまっているが、実際の分析にどのように使えるか、どういった精緻化が必要かなどは、今後機会を改めて論じたい。

参照文献

Anderson, John R. 1980. *Cognitive Psychology and its Implications*. San Francisco: Freeman and Company.

Ariel, Mira. 1990. *Accessing Noun-Phrase Antecedents*. London: Routledge.

Atkinson, R. C. and Schifrin, R. M. 1968. "Human Memory: A Proposed System and its Control Process." In K. W. Spence and J. T. Spence. (eds) *The Psychology of Learning and Motivation,* Vol. 2. London: Academic Press.

Atkinson, R. C. and Schifrin, R. M. 1971. "The Control of Short-term Memory." *Scientific American* 225, 82–90.

Bally, Charles. 1932, 1964[4]. *Linguistique générale et linguistique française*. Berne: A. G. Verlag.(シャルル・バイイ『一般言語学とフランス言語学』小林英夫訳、1970 年、東京：岩波書店.)

中條和光. 2001.「文の理解」、森敏昭（編）『認知心理学を語る 2』33–54、京都：北大路書房.

Crystal, David. 2003[5]. *A Dictionary of Linguistics and Phonetics.* Oxford: Blackwell.

Cutting. 2007[3]. *Pragmatics and Discourse*. London: Routledge.

Eysenck, M. W. 1986. "Working Memory." In Cohen, G, Eysenck M. W. and LeVoi M. E. *Memory: A Cognitive Approach,* 1–89. Philadelphia: Open University Press.

Gazdar, Gerald. 1979. *Pragmatics: Implicature, Presupposition, and Logical Form*. London: Academic Press.

Givón, Talmy. 2001. *Syntax II* (*revised edition*). Amsterdam: John Benjamins.

Huang, Yan. 2007. *Pragmatics*. Oxford: Oxford University Press.

James, William. 1890. *The Principles of Psychology*. London: Holt.

Johnson-Laird, Philip N. 1983. *Mental Models: Towards a Cognitive Science of Language, Inference, and Consciousness*. Cambridge: Cambridge University Press.

加藤重広. 2003.『日本語修飾構造の語用論的研究』東京：ひつじ書房.

加藤重広. 2004.『日本語語用論のしくみ』東京：研究社.

加藤重広. 2006a.「線条性の再検討」、峰岸真琴（編）『言語基礎論の構築の構築へ向けて』1–25、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

加藤重広. 2006b.「語用論 の / という 問題」、峰岸真琴（編）『言語基礎論の構築の構築へ向けて』169–190、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

加藤重広. 2007.「ソシュールから語用論へ」『月刊言語』36(5)、40–47、東京：大修館書店.（再録：『『言語』セレクション第 3 巻』281–287、2012 年）

加藤重広. 2009.「動的文脈論再考」『北海道大学大学院文学研究科紀要』128 号、195–223.

加藤重広. 2015.「発話的な効力と発話内的な効力」、加藤重広（編）『日本語語用論フォーラム』1、27–56、東京：ひつじ書房.

加藤重広. 2016.「統語語用論」、加藤重広・滝浦真人（編）『語用論研究ハンドブック』159–185、東京：ひつじ書房.

Kempson, Ruth, Wilfreid Meyer-Viol, and Dov Gabbay. 2001. *Dynamic Syntax: The Flow of Language Understanding.* Oxford: Blackwell.

Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar Volume I, Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.

呂（Lu）晶. 2015.『日本語広告表現の語用論的研究―形式と機能に着目して―』（北海道大学文学研究科学位論文）（http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/61607/1/Lu_Jing.pdf）

Manchester, Martin L. 1985. *The Philosophical Foundations of Humboldt's Linguistic Doctrine*. Amsterdam: John Benjamins.

Martinet, André. 1970. *Éléments de linguistique générale*. Paris: Libraire Armand Colin.

村井俊哉・濱中淑彦. 1999.「意味記憶」、浅井昌弘（編）『臨床精神医学講座 S2 記憶の臨床』101–112、東京：中山書店.

苧阪満里子. 2002.『ワーキングメモリー』東京：新曜社.

Salamé, Pierre. and Baddeley, Alan D. 1982. "Disruption of Short-term Memory by Unattended Speech: Implications for the Structure of Working Memory." *Journal of Verbal Learning Verbal Behavior* 21, 150–164.

de Saussure, Ferdinand. 1916, 1972. *Cours de linguistique générale*.（Tullio de Mauro注釈版. 1972. Paris: Payot. を参看）

Sperber, Dan and Deirdre Wilson. 1987. "Précis of Relevance: Communication and Cognition." *Behavioral and Brain Sciences* 10, 697–754.

田中康文・橋本律夫. 1999.「エピソード記憶」、浅井昌弘（編）『臨床精神医学講座 S2 記憶の臨床』75–87、東京：中山書店.

浮田潤・賀集寛（編）. 1997.『言語と記憶』東京：培風館.

Wilson, Robert A. and Frank C. Keil（ed）. 1999. *The MIT Encyclopedia of the Cognitive Sciences*. Cambridge MA: The MIT Press.

山下光. 1999.「作動記憶」、浅井昌弘（編）『臨床精神医学講座 S2 記憶の臨床』61–74、東京：中山書店.

吉益晴夫. 1999.「自伝的記憶（遠隔記憶）」、浅井昌弘（編）『臨床精神医学講座 S2 記憶の臨床』88–100、東京：中山書店.